

Title	西アフリカの織機 : その変遷と布産業
Author(s)	井関, 和代
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52902">https://doi.org/10.18910/52902</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 西アフリカの織機——その変遷と布産業

井関和代／大阪芸術大学

報告者は本学会において既にサハラ以南の西アフリカに伝承されてきた「布の存在理由」の多くを、寒さや暑さから身体を守る衣服である前に、儀礼とくに葬儀用「埋葬布」あるいは特定の人びとの「威信財」であったことを繰り返して述べてきた。本大会では、西部大西洋沿岸部と上ニジェール川流域の〈足踏み式機の変遷と布産業〉をテーマに報告を行った。

さて広大な西アフリカのうち、セネガル北部からアイボリーコーストの大西洋沿岸部地方には古ニグロイド文化の形質を継承する民族が多く居住し、古文化層と考えられる足踏み式機が伝えられ、この大陸の染織発達史を探る貴重な過渡期的機が伝承されている。とくにセレル族やメンデ族などに使用される機は、北アフリカのベルベル族系の使用する水平機に似た部位が認められる足踏み式機が使用される。一方、この地方の人々がマンディンゴ機と呼んでいるマンデ系の民族集団の多くは、内陸部のニジェール川大湾曲部に居住し、西アフリカ一帯に共通する足踏み式（高機）を使用する。学術的にはこれを「西スーダン式機」と通称している。

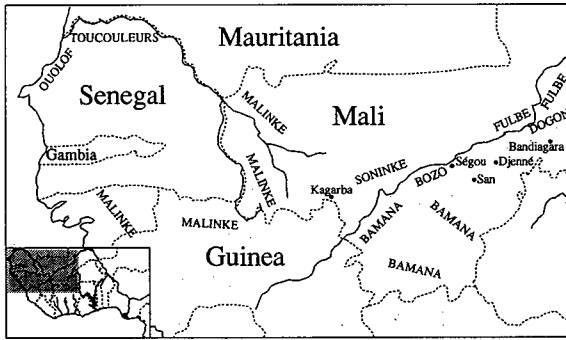
この西スーダン式の織機の普及とイスラム教の浸透、加えて19世紀後半のヨーロッパ諸国の植民地時代にアメリカ種のワタが栽培されたことが、西アフリカの布産業を発展させてきた。しかしながら、未だもってこの織機の起源については明らかにされずにいる。

報告者もまたこの謎を解くべく、西アフリカ各地で調査を行なっているが、これまでの調査地では、「モノ」を製作する工人たちは、

その民族集団の成員であり、鍛冶・陶工にいたっては、特殊な呪術力を持つと畏怖の念を持って特別な位置を与えられていることを観てきた。だが上ニジェール川流域では、これまでとは異なり、工人が一般民と区別されることを観察した。その職種は陶芸・金工に加えて、革工芸・木工に携わる人びとであった。

報告者はこの「工人集団」を、かつては古代職能技術集団として存在したが、農業や牧畜業を主業とする民族集団が支配する時代になると、戦さで捕えた他民族とともに自集団の下層階級に組み入れられたのではないだろうかと推測し、これら各民族集団内での織師たちの社会的な位置が、西アフリカの織技術伝播・変遷を探る一つの鍵となるのでは、と考えている。そして現存する西アフリカの最も古い裂布が、現マリ国の11世紀代のバンディアガラ断崖の墳墓から出土していることから、同時代にこの地域に居た民族集団が、この織布の提供者であったという推定もできる。

そこで現マリ国内で布産業に携わる各民族集団の織師の社会的な位置と織機の形態についての調査を進めた結果、バンディアガラ出土の布は羊毛、木綿からなり、その意匠のほとんどが、現在のニジェール川大湾曲部とその周辺地域で居住するフルベ族の生産する布と類似することが分かった。また、フルベ族の間で伝承される、彼らの移動史では、バンディアガラに近いニジェール川大湾曲部にいた時期が、およそ8世紀頃であることや、素材の羊毛を飼育できる地方が大湾曲部地方からガオ地方に限定されること、そして、羊毛と木綿を用いて布を織る集団がフルベ族のみであ



地図 上ニジェール川地域

ること、といった考察からバンディアガラ出土の布の提供者にフルベ族がなりえた可能性は、他の各民族集団よりも高いと云える。また牧畜民であるフルベ族には、彼らに従属する織師集団・マープベがいる。マープベたちの用いる羊毛用機に、現在の「西スーダン式機」への過渡期的特徴を幾つか観た。

他にも現マリ国には13世紀に勃興した古マリ帝国の末裔であるとするマリンケ族やバマナ族、デュラ族などのマンデ系諸族が多く居住する。このうちマリンケ族は伝統的には布を生産しなかった。バマナ族はイスラム教化が遅く、おそらく織技術の導入も遅れたと推測できるが、現在では、「西スーダン式機」を用いて布を生産し、フルベ族とともにマリにおける最大の織師集団である。その文様織技術の豊かさは、むしろフルベ族に新デザインを提供するほどの勢いである。しかし、このバマナ族はフルベ族と同様、あるいはそれ以上に厳しい社会階層を組織し、織師は一般農民であり、農閑期に織作業を行なう。

また、マリンケ族の支族であるマラカ族にも織技術の伝承はない。彼らは農業と商業に従事し、下層階級である技能集団を戦いで捉えた他民族をもって構成していた。マラカ族の商業範囲はマリ国内に限らず西アフリカ一帯に広がり、その商品には旅先で入手する塩・

穀物などに加えて、マリ国内の村々の織師たちに注文した「木綿布」があり、これを東部や森林部へ売り歩いたという。

現マリ国内での多くの民族集団は「商人」を「Doiula」と呼ぶ。これが前述したマラカ族の商人であるか、民族集団のデュラ族であるか、単に商人を意味するかは、民族集団によって異なっている。

しかし、西アフリカ各地からは織布を伝え、後に織機を広めたのが「デュラ」であるとする情報が多く伝えられている。

例えば、ブルキナファソに居住するモシ族を調査する川田順造氏は、「王が即位する時、モシ族ではデュラの織師が白い木綿の布を新しく織り、頭巾の長衣と袴をこしらえ、王宮にもってゆく。」と王権における布とともにデュラの活躍を述べている。また Boser-Sarivaxévanis 女史の報告では、「Dyola (Dioula) 族。その起源については多説に分かれ、マリンケ族を祖先とする民族集団あるいはその支族とする説やあるいは民族集団ではなくスーダン地方の社会階級の一つとする説。さらに、カンカ ムーサ王(1324-1335)のメッカ巡礼の後、古マリ帝国に住み着いた外国人を相手に商才を伸ばした商人階層という説もある。」という。

いずれにせよ、イスラム化と19世紀後半のヨーロッパの植民地時代に拍車がかかった木綿布製作は特別な階層の衣料あるいは埋葬布といった製作目的から、一般階層のための衣料へと広がった。その背景にイスラム教徒デュラの活躍があり、今日の西アフリカの布産業への道を開いたといえるであろう。

以上マリ調査で得た織機の資料提示とともに報告した。今後、このデュラが西アフリカに張り巡らせた商業基地の織機が明らかにされることによって西アフリカの布産業史がみえてくるのではないだろうか。